ジャック・ギルマーツ著

『中国共産党史 1921—1949年』

Jacques Guillermaz, *A History of the Chinese Communist Party 1921-1949*, translated by Anne Destenay, London, Methuen & Co Ltd., 1972, xviii+477 p.

I

本書は JACQUES GUILLERMAZ, *HISTOIRE DU PARTI COMMUNISTE CHINOIS* (*1921-1949*), Paris Payot 1968, 450 p. の英訳である。原著者のジャック・ギルマーツは，パリの École Pratique des Hautes-Études (VIe section) 教授，Centre de Documentation Sur l'Extrême-Orient Contemporain 主任であり，中国語教育に従事している。著者は，1930年代および1940年代に，外交官として，北京，重慶，南京に滞在した。15年間を越える中国滞在中，様々な政治勢力の浮沈を自ら目撃したが，このことは，本書を書きあげる上で，大きな役割を果たしたと思われる。

著者には，これまで，『人民中国』*La Chine Populaire* (Presses Universitaires de France-Que sais-je?) 1968年第4版，共著『中国の諸様相』第3巻 *Aspects de la Chine*, Tome III (Presses Universitaires de France) などの著作があり，最近は，本書の続編として，文化大革命で明るみに出された情報もまじえて，1949年10月の中華人民共和国成立後の中国共産党史を扱った『解放後の中国共産党（1949年10月1日—1972年3月1日）』*Le Parti Communiste Chinois au Pouvoir* (*1er octobre 1949—1er mars 1972*), Paris, Payot, 1972, 552 p. を刊行した。さらに，中国で自ら目撃したり，参加した事件を扱った著書を準備しており，その中には，国民党，共産党の主要な人物の描写なども含まれるといわれる。

II

本書は，中国共産党がその創立より，1949年10月，国家権力を獲得するまでの党史の概説（通史）である。「前書き」に，研究の基礎を提供し，現在の中国の諸問題を理解する上で，役立つことが期待されると述べられている通りであり，あるテーマ，ある事件，ある時期に焦点を絞った専門的な研究書ではない。しかし，著者は，*The China Quarterly* 掲載の党史関係論文その他を丹念に読み，研究成果を吸収し，手際よく通史にまとめるのに成功している。

ところで，「前書き」は，台湾海峡の両側からの公式の説明が，既定の事実を改変したり，曇らせ始めていると指摘し，長期間，現代中国の変化してきた姿——すなわち，最後の諸軍閥，国民党，共産党の姿をじっと見，混乱した時代の空気を吸い，その主要な人物と会うことができたという，まれな好運にめぐまれた西洋の観察者が，党史の総合を企図したのは適切であろうと述べている。確かに，最近，とりわけ文化大革命後，党内の政策論争，権力闘争と絡んで，党史が過去に溯って再解釈されたり，書き換えられてしまう傾向がみられる。たとえば，1945年4月20日，第6期7中全会で採択された，1931年はじめから1934年末までの「左」翼日和見主義路線（第1次王明路線）の誤りについて，その社会的・歴史的・思想的根源にまで溯った詳細な総括である「若干の歴史的問題についての決議」は，『毛沢東選集』第3巻に，「学習と時局」の注として全文収録されていたが，文化大革命後，胡喬木らの起草になるものであり，劉少奇が大幅に手を入れているといわれ，1967年以降出版の『毛沢東選集』から削除された。また，1951年に発表された，胡喬木「中国共産党の30年」に代わる，公認党小史になるかと思われた，『人民日報』・『紅旗』・『解放軍報』編集部「中国共産党の50年を記念する」（1971年7月1日）も，林彪失脚後の現在では，書き換えが必至であろう。

著者は，多くの著作が，1949年以前は国民党によって，それ以後は北京政府によって組織的に破棄されてきたことに触れ，新しい体制が，敵の手になる著作ばかりでなく，「偏向者」とか「反革命分子」という評価を下された共産主義者の著作を除去するために，多大の注意を払ってきた，と指摘している（本書 p. 459）。さらに，著者は，1966年の文化大革命は，二つの相反する傾向を引き起こしたと述べている。すなわち，一方では，毛沢東の著作およびその注釈だけは手を触れずにおいて，残りの個人の記録や著作を破棄してしまった。中国史全体の観点からみると，損失ははかり知れない。他方，紅衛兵により，多くの指導的人物を狙った，攻撃的で，一般に公平を欠いた書物が爆発的に生み出された。それらを，党史，とりわけ1949年以前の党史の新しい解釈の基礎として使うことはできないが，全く無視してしまうこともできない。明白な誇張や虚言を捨てて考慮しなければならない，と主張している（pp. 459—460）。文化大革命後の党史の書き換えは，そのまま鵜呑みにするわけにはいかず，文化大革命で明らかにされた史料を，その当時の

具体的状況と照らし合わせて再検討する作業が必要である。

しかし，著者は，史実の書き換えに対する批判的見解にもかかわらず，中国を全く突き放して見ているわけではない。「前書き」で，著者は，中国を愛し，尊敬しているほどであるが，外国人であるということが，半世紀間，中国をすり減らしてきた，ものすごい熱狂に巻き込まれるのを避けるために必要な間隔を提供してきた，と記している。こうした著者の態度は，本書のはじめに，『詩経・大雅』の冒頭，「文王」の一節「周は旧邦と雖も，其の命維れ新なり」を記していることからもうかがえる。周は始祖以来，1000年以上も続いた国柄であるが，天命を受けたのは文王の時であり，なお新しい時であるとの意味である。文王は殷の紂王の時，天下を三分してその二を保つといわれたほど，徳望・勢力があったが，その子武王に至って殷を倒し，周王朝を始めた。天下に王たるべき天命は，この文王の時，周に降ったというのである。この詩全体の趣旨は，文王がよく徳を修めて天命を受けたことを讃え，天命は徳のあるところに従い，徳を失えば離れ去るもので，これを保つのは容易ではない。長く天命を失わぬようにと，子孫を戒めたものである。著者はおそらく，文王に，1949年以前の中国共産党の姿を見ているのである。

Ⅲ

次に，本書の構成は以下の通りである。

序文

第1部　中国共産党の起源と誕生

第2部　中国共産党――その創立より国民党との決裂まで（1921年7月1日――1927年8月1日）

第3部　江西期（1927年8月――1934年10月）と長征（1934年10月――1935年10月）

第4部　延安期と中日戦争（1935年10月――1945年8月）

第5部　権力の獲得と人民中国の樹立（1945年8月15日――1949年10月1日）

結論

時代区分は，長征後，7・7事変の起こるまでの期間（1935年10月――1937年7月）を中日戦争と同じ部に入れている以外は，中国の史家の区分と変わりがない（中国では，7・7事変以前を第2次国内革命戦争の時代，以後を抗日戦争の時代と区分する）。

ここで，各部の内容を簡単に紹介するとともに，若干の問題点，感想を書き加えることにする。まず，第1部で，著者は，1921年当時の政治的・経済的・社会的状況，厳復らを通じて導入された西洋の政治思想，マルクス主義の前走者――アナーキズムに触れ，五・四運動を経過して，最初の中国のマルクス・レーニン主義者陳独秀・李大釗らが生まれ，1921年7月1日，上海で1全大会が開かれるまでを扱っている。

第2部では，第1次国内革命戦争の時期を扱っており，国共合作の成立から，1927年4月12日の蔣介石のクーデター，続いて武漢政府からの共産党員の退出，8月1日の南昌暴動に至る過程を記述している。1927年の共産党の敗北の原因として，著者は，プロレタリアートの弱体と経験不足，保守的で遅れた農民大衆の存在，地方で革命を組織するに必要な時間と幹部の不足などとともに，まず第1に，次の点を指摘している。革命を始め，育ててきた中国の知識分子の間では，何にもまして，民族主義的，排外的な感情が重みを持っており，共産主義を選択した者の場合も，社会的な感情に目ざめるのは遅れた。中国は，何よりもまず，政治的・軍事的な派閥から解放され，不平等条約の廃止により，屈辱的な半植民地状態から解放されねばならなかった。国民党は，共産党以上に，この民族主義的な息吹きを体現しており，中国の知識分子の大多数は，最初は，共産党よりもむしろ国民党に引きつけられた（pp. 139―140）。

こうした見解は，誰が，この時期の国民革命を主導したのかという問題と絡んでくる。著者は，国民党こそが，最も強力な軍閥を除去したり，彼らから権力を奪ったという声望を享受しうると述べ，中国共産党が最終的に勝利したことによって，あるいは，国共両党が対等の立場に立っていたと主張したり，民族主義者による中国の統一において，若い共産党が非常に活発な役割を演じたように描き出す，若干の現代史家によって与えられた，ゆがめられた見方にまどわされてはならないと指摘している（p. 67）。確かに，この時期の両党の合作（合作は対等の協力の意味，国民党は『容共』と称した）は，双方の対等の立場での協力ではない。20数年の戦いの歴史，孫文の粘り強い個性，多くの革命烈士などに支えられた国民党の声望と威信は，創立間もない少数の共産党とは比較にならなかったはずである。この時期に果たした国民党の役割を，著者のごとく，認めることは，なんら共産党をおとしめたり，過少評価することにならないのはいうまでもない。

なお，些細なことであるが，著者は，孫文のソビエト中央執行委員会あての遺書は，死の前日，汪精衛によっ

て起草されたのであろうと記している（p. 94）。「余，国民革命に力を致すこと凡そ四十年」に始まる政治遺嘱は，汪精衛が起草し，国民党政治委員会の承認を得たものであるが，ソビエトあての遺書については，汪精衛自身，孫文の死の前日（1925年3月11日），二つの遺嘱（政治遺嘱と家族あての遺嘱）の署名が終わった後，「他に，英文秘書陳友仁同志が起草したソ連の同志あての書簡があり，宋子文同志が一度，読み上げ，先生は聞き終わると英文で署名した」（『中国国民党第二次全国代表大会会議録』中国国民党中央執行委員会印行，民国15年，pp. 18—19）と発言しており，間違いであろう。また，中共中央「蔣介石の革命的民衆殺害に際しての宣言」（1927年4月20日）を引用している個所の中に（p. 128），「中国の人口の50%は農民であり……」という一節があるが，原文は80%である（『嚮導週報』第194期参照）。

第3部は，1927年8月7日，瞿秋白を主とする中央緊急会議により，陳独秀路線が否定され，さらに李立三，王明と党中央のリーダーシップが，移行していく時期であり，折角築いた江西ソビエトを，国民党軍による包囲討伐を支えきれず，放棄して，長征に出発し，陝西省北部に到達するまでを扱っている。史料的制約などの点から研究が一番，困難な時期である。この時期について，著者は，およそ次のような評価を下している。党と軍にとって非常に価値のある幹部を訓練しただけでなく，中国の共産主義者は，組織し，管理すべき根拠地と人口を持つようになった。それは，実際の経験と，運動の拡大によって引き起こされた問題をはっきりと見抜く力を彼らに与えた。李立三の冒険が失敗した後は，モスクワから指令されたり，上海の党中央の秘密会議で形成された政策に合わせて行動することは少なくなり，党の計画立案は，時と場所によって課せられた制限を認識し始めた。党の階層機構全体が実際上の考慮を払うようになった。とりわけ，毛沢東，朱徳は，国民党に対抗して，できるだけ軍隊を長続きさせるとともに，都市とプロレタリアートにより多くの関心を持っていた中央委員会に対抗して，自分達の発展を守ることを望んだ。また，ある程度の教条の統一性，習慣なども，この困難な時期に発展させられたように思える。これは，延安期および最後の内戦中に，軍事指導者の間に見うけられた，リアリズムと団結の起源かも知れない。さらに，江西期は，共産党に，単に宣伝と付随する環境の巧みな運用のためによるのではない，政治的・道徳的声望を与えた。つまり，今や農民運動になったのであるから，共産主義者の運動は，中国の伝統的な歴史の一部となり，外からの触発による都市で生まれた労働者の運動以上に，同調と理解を喚び起こした。そのため，数量と地理的な範囲の点で，はるかに広い前途を開いた（p. 250）。

しかし，こうした7年あるいは8年間の試練によって，選びぬかれ，強化された道徳的な利点，幹部の機構の形成にもかかわらず，江西期は1927年と同様，完全な敗北に終わった。1927年は都市の支持を失ったが，今度は地方ですべての支持を失った。党員数も激減したが，党員の大部分は，職業軍人となった農民であり，この軍事プロレタリアート（military proletariat）が，次の10年間の党の背骨を構成することになる（p. 251）。軍事プロレタリアートという考え方については，著者の詳しい説明が欲しかった。

次に，長征について，著者は，単なる目立った軍事的事業ではなく，遠大な結果を伴った政治的事件であり，中国共産党が，相当の威信をかちとった事業であるとともに，新たな統一戦線の結成を進めるのに役立つ政治的成功であったと評価している。同時に，長征の意義の一つとして，モスクワから一層の独立を達成するのに役立った点をあげているのは注目される（p.263）。なお，著者は，長征途上，遵義で開かれた政治局拡大会議で，毛沢東は臨時の中央委員会主席となったと記している（p.255）。遵義会議については，色々と不明な点が多いが，中国の現代史家のいう通り，中央軍事委員会主席となったとみなすのが適当ではなかろうか（新島淳良「中国現代史における毛沢東思想——近代史研究所　張友坤・尹士徳両氏に聴く」〔『毛沢東著作言語研究』第3号，1969年〕，p. 151参照）。また，陳昌奉『長征の頃の毛主席』（外文出版社，1959年5月初版）に，編集部が付けた長征についての解説は，遵義会議で「毛沢東を中央書記局の書記に選出した」（同書，p. 124）と記していた。ところが，同書は，改訂・加筆され，『毛主席にしたがって長征』と改題され，1972年，第3版が発行されたが，当該個所は削除された。この改訂は，当時，毛沢東による党の支配には限界があったことを暗に認めたことにならないだろうか。結局，毛沢東の地位については，中央紅軍に対する指導権を確立したにとどまったとみるのが穏当であろう。

第4部では，陝西省北部で党を再建し，抗日統一戦線を結成し，抗日戦争を通じて地域的・軍事的に拡大し，解放区を創出していく。その過程で，国民党との対決が強まっていく状況を記している。著者は，抗日戦争の終

結時，共産党は，若くて，新しく，動的な党という，ライバル国民党には欠けていたイメージを持っており，党員の質と社会的なプログラムのふさわしさの点で，確かに敵国民党より優れていたとみなし，この優越性と国民の巨大な疲弊のため，共産党は敏速に勝利することができたのだと説明している（p.372）。また，1945年4月から6月にかけて開かれた7全大会が毛沢東に並ぶものなき正統性を与え，毛沢東が党の唯一の，特定の指導者となったが，著者は，この7全大会を「現在の共産党の最初の党大会」であったという評価を下している(p.370)。

第5部は，国共交渉がまとまらず，内戦が始まり，その結果，遂に1949年10月1日，中華人民共和国が成立するまでを扱っている。著者は，1946年2月25日，マーシャル将軍，張治中，周恩来の間で結ばれた，いわゆる国共整軍協定を政治協商会議決議などよりも重要なものであるとみなし，この協定が実効を持ちえたならば，疑いなく連合政府の組織が可能になり，内戦は避けられたであろうと推測しており(p.386)，そうならなかった原因として，両党の押えることのできない相互不信をあげている（p.387）。その後，東北を中心に内戦が拡大していく。著者は，東北の国民党軍の全軍覆滅の運命を決めた遼瀋戦役についての記述の中で，林彪が，交通の要衝で，瀋陽と長城の中間の錦州に全力を注ぎ，次々に13個縦隊を投入したと記しているが（p.406），最近の林彪批判の中で，錦州攻略は毛沢東の定めた方針であり，林彪は，それを変更して，北上して長春を打つよう建議したことが明らかになった（沈鈞「毛主席战略思想的伟大胜利――学习《关于辽沈战役的作战方針》」〔『紅旗』1972年第8期参照〕)。たとえ，特定の指導者を批判するための意図的な暴露であっても，それが史実であれば，認めざるをえないであろう。

Ⅳ

1949年以前の党史をまとめる上で，最大の問題の一つは，おそらく，1949年，中国共産党が勝利した要因を探し求めることである。その要因として，著者はまず第1に，党外の要因を挙げている。すなわち1931年の9・18事変以後，1945年8月15日の中日戦争の終結に至る時期，国際情勢が共産党に有利になり，中日戦争が，長征後，消えそうな生命を保ってきた共産党に再生をもたらした（p.422）。著者も引用しているが，毛沢東自身，「もし，日本の皇軍が中国の大半を占領していなかったら，中国人民は団結して，これに反対して闘うことができなかったし，中国共産党は権力を奪取することができなかったでしょう。」（1964年7月10日，毛沢東主席と佐々木更三らの諸氏との会見記録，著者はp.265で，傍点部を中華人民共和国は生まれなかったであろうと訳している）と語っており，中国共産党自体の闘争という要因を軽視しない限り，こうした見解は当を得ていると思われる。

著者は，同時に，この戦争が7年間の戦争の困難な時代を支えるに必要な準備と組織を欠いていた国民党の，経済的・道徳的没落をもたらしたと指摘している。こうした国民党と比較して，共産党は次の点で優れていた。(1)集中力――組織的・政治的・イデオロギー的に高度に集中しており，日本軍後方で，党内での反乱や敵への投降の危険なく，孤立した根拠地を建設し，指導できた。(2)組織力――単純で，簡潔な組織原則をもって，大衆に近づき，大衆を獲得し，訓練し，制御するに必要な機構を敏速につくりだした。(3)イデオロギー――ユニークで便利な参照の源泉であり，幹部と党員にとっての標準であり，大衆消費用に簡潔なスローガンにまとめられる。イデオロギー自体の厳密さは行動の厳密な均一性を確保する。(4)幹部――長い間，非合法化されていた運動に参加してきた幹部は，愛国か，革命的激情，あるいはその両方の結合により運動を行なうが，彼らの無私と行動力は国民党の幹部より優れていた。(5)使命感――共産主義運動は愛国運動であるだけでなく，時代遅れとなった習慣を除去したり，「正義」とりわけ「平等」という理念を導入しようとする。民族的・社会的な意味での「解放」運動が人民の名によって進められた（pp. 442―443)。

このほか，土地政策と軍事という2大分野でも，原則とその適用の面で国民党より優れていた（p.444)。最後に著者は，国民党と比較して，当初，数量，物資，領土の点で劣っていたにもかかわらず，共産主義者が勝利できたのは，彼らが，政治的・軍事的・心理的要因を有利な方向に総合し，それらを正確に，しかも賢明に適用したためであると結論づけ，中日戦争が，そのために必要な条件を創出するのに責任があったと述べている(p.445)。

Ⅴ

以上述べてきたごとく，本書は1968年までの個別的な党史研究を総合した，優れた概説書である。ＡＰ通信社等から提供された写真43枚が収録されており，1938年当時の若き丁玲の写真など貴重と思われるものも多い。34枚もの略図も，本書の理解を容易にしている。

（東大教養学部助手　石井　明）